

# 生きていく憲法

鈴木久子（2016年8月執筆）

私は今まで60年あまり、憲法をほとんど意識せずに暮らしてきた。意識しないでもものほほんと生きられる環境で、典型的な「戦後の民主主義」を謳歌してきたのだと思う。憲法全文はもちろん読んだことがなかった。そもそも、私の年代は中学や高校で歴史は明治維新止まり、憲法では象徴天皇、戦争放棄、基本的人権、男女平等くらいを知っているだけ、当然GHQが作成に関わっていたことも知らなかった。このまま行けば多分ずっとそうして一生暮らしたことだろう。

でも、5年前の東日本大震災を契機に私の意識が変わった。伝えられる被災地の惨状に茫然自失し、続く福島原発事故は言葉に尽くせない衝撃だった（私の郷里は宮城県）。何かできることをせずにはいられず、自分が関わる海外支援のNPOでも、早速被災地の支援を始めた。これは他人事ではなかった。特に原発は何としてもここで断ち切らなくてはならない。頭より体が反応する形で私は街頭に出た。脱原発1000万人署名、デモ、集会、官邸前抗議活動等々。何回読んでも頭に入らない原発の本も読み、講演も聞いた。自分で学習会も主催した。いまでもそれは生活の一部として続いている。

今考えれば、これが私の転機となった。単なる怒りや批判で終始するのではなく、変だと思ふ疑問は表に出す。想像力を使ってわが身の事として捉え、行動する。黙っていたら理不尽なことも認めたことになってしまう。過去に単発的に関わった市民運動の経験や政治について常日頃感じていたことが、すっきりした一本の線の様合流した。「お任せ民主主義」脱却、「主権在民」の体現だ。

いつ頃からか「GHQに押し付けられた」「時代にあわない」など、本質的な議論も説明もなく憲法を「改正」しようとする現政権の動きに切羽詰まった危機感を感じるようになった。知識がなければ、考えることもできない。押し付けられたってどういうこと？誰がどうやって作ったの？

還暦を過ぎて初めて学ぶ憲法は、果てしない宇宙の闇のように思えた。私はこんな歴史の流れの上になんか乗っかるようにして生きていたのか、何も知らずに。知識が少しずつ蓄積されるにつれ、憲法成立に込められた事実の複雑さにすくんでしまう。沖縄の占領と引き換えた象徴天皇の存続、敗戦国として受諾するしかなかった武力放棄の平和憲法、アメリカの戦後戦略に組み込まれつつ始まった戦後の日本、戦時中に続く沖縄の犠牲のもとに、本土は平和と安全を担保され、経済成長を謳歌し、今日に至っていたことを知った。空腹になればご飯を食べるように、何の疑問もなく平和憲法を享受していた。

今、私にとって憲法は学校の教科書に見たものではない。この憲法が生まれるに至る過程で、長い戦争の時代から始まり、他国の人々を巻き込み、無数の平穏な日常をどれだけ破壊したかと思ひめぐらす。しかもその傷跡は未だに癒されていない。日本でも近隣諸国でも、生身を切り裂くはかり知れない犠牲を強いたその上に、この憲法が成り立っている。星の教程の、しかしそれぞれは別個の人間の生活の痕跡が、巨大な集積物になって平和憲法を下から支えていると思う。だから、憲法は生きている。一人ひとりの暮らしを支える光のように。

昔、どこかで見てストンと腑に落ちた憲法の条文がある。第25条「すべて国民は健康で文化的な最低限度の生活を営む権利を有する」これは私にとって分かりやすかった。肉体と精神の健康に基本的な衣食住、そして文化的とは、ただ生存するのではなく基本的人権に立脚し、人としての尊厳の約束された生活のことだろう。この誰もが平等な、文化的な最低限度の生活が人生の始まりに約束されたら、どんなにいいだろう。あとは自分の努力次第ということで人生のスタートに並べるのだから。今もそう考えて

いる。後でこれはGHQ案がなく、帝国議会の小委員会で追加修正された条文だと分かった。25条は私の希望なのだ。